

2014年9月28日「実体の関係」

＜ 聖書箇所 ＞ 「マタイによる福音書 18章18節～20節」

よく言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つなわれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう。また、よく言うておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にあるのである。

＜ 説教抜粋 ＞ 「実体の関係」

今日の聖句は、マタイによる福音書の18章18節～20節です。この聖句を二つにわけて考えてみます。まず前半です。「よく言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つなわれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう。」。まず、ここまでであります。

ここで、あなたがたが地上でつなぐことが、天でも皆つながれて、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれて行くと、このように書かれています。ここで鍵となる言葉は「つなぐ」と「解く」です。この「つなぐ」と「解く」は、当時は法的な意味で使われたようです。つまり「つなぐ」というのは「許可しない」という意味で、「解く」というのは「許可する」という意味です。したがって、あなたがたが許可したものは天でも許可され、あなたがたが許可しないものは天でも許可されないということです。

つまりここには、法的に許す権限があるのか無いのかという問題が書かれているということになります。ところで、イエス様は罪を赦す権威をもってこられた方だとあります。罪を赦す権威は、本来はメシヤが持っております。しかしここには、地上の人間にも、罪を赦すか赦さないかという権威が与えられるとも読み取れることが書かれています。この聖句の背景には、イエス様が近い将来、十字架で亡くならねばならないという前提があります。

もしもメシヤが地上にいなくなってしまった場合、地上に残された信徒たちは、メシヤが持つ権限を代行しなければなりません。親がだんだんと年をとると、親が持っていた権限が次第に子どもたちへと移譲されて行きます。これを別の言葉で表すと「相続」となるでしょう。つまり、権限が親から子へと移譲され、今度は子どもが家庭や社会に対して責任を持つ立場になるのです。「また、よく言うておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中

にいるのである」。これも、前の箇所と似た話です。

この箇所は、地上で複数の信徒が心を合わせて祈ると、そこに神様が臨在するという意味に解釈されることが多いかもしれません。この箇所を別の観点で見えます。旧約聖書には、一つの事柄を証言するためには、ふたりないし三人の証人がいなければならないという話がかかれています。ある人の罪について証言するためには、ふたりないし三人の証人がいなければならないということです。

このように、この箇所も法的な意味を持つ言葉であると考えられます。つまり、ふたりないし三人の集まったところには、罪の赦しに関連するメシヤ的権威が与えられるということになります。このような解釈に基づけば、この聖句も、イエス様が亡くなられた後を前提としたものであると言えるでしょう。どんな親でも、子どもにはしっかりしてもらいたいと思っています。

しかし、もしもそのような親の気持ちを子どもが知らなかったとするならばどうでしょうか。当時の弟子たちも、決してイエス様の気持ちをよく知っていた訳ではありません。弟子たちは、自分たちのなかで誰が一番偉いのかということに関心がありました。しかし、イエス様は、そのような弟子たちに、謙遜にならなければ天国に入るにふさわしい者になることができないと言いました。

さて、真の父母様は、私たちに対して何を願っているのでしょうか。それは、氏族的メシヤになるということだと思います。氏族的メシヤという言葉には「メシヤ」という言葉がつきます。これは、たとえ氏族という範囲であったとしても、「メシヤ」の権限が私たちに移譲されることを意味します。たとえ次元は異なっても、私たちの判断が、真の父母の判断のごとくの権威となる訳です。今日の説教の題名は、「実体の関係」です。私たちは、実体で、真の父母の愛を相続してゆかなければなりません。それは、観念であってはなりません。